

同志社大学
2010年度卒業論文

論題：ボランティア

ー集団で行なう難しさと面白さー

論文

1. 研究の意義

2. 研究の目的

3. 研究の方法

4. 研究の結果

5. 研究の結論

参考文献

社会学部社会学科

19071032

木村あさみ

担当教員：立木 茂雄

(22,525 文字)

要約

2007年12月、筆者は友人とともに、京都府京都市の同志社大学で音楽ボランティアサークル、PAZ MUSICA(パズムシカ)を立ち上げた。それから4年間、ただがむしやりに活動してきた。しかし、振り返ると常に安定した参加頻度を保っていたわけではなく、時期によって大きな差がみられた。定義することが極めて困難なボランティアをサークルとして運営していくにあたって必要なものとはなにか、参加頻度を一定に保つために必要なこととはなにか。今回はとくに、大学生が集団でボランティア活動を行うことに限定して考える。分析方法は、自らのサークルでの4年間の出来事のログをとり、コレスポネンズ分析を用いた。その結果、大学生が参加頻度を一定に保つことは極めて難しいのかもしれないが、“相手のことを思いやる気持ち”を持ち続け、コミュニケーションし続けることが必要であることや、率先して活動をするリーダーの存在が必要ながわかった。個人的な問題を多く含むことにはなるが、同じように感じている人がいるはずである。この論文が、これから自らの後輩を含め、団体を運営していく人々に役立つことを願っている。

キーワード

ボランティア・自主性・集団行動・コミュニケーション・相互行為

目次

はじめに

1 ボランティア

- 1.1 ボランティアの定義
- 1.2 集団で行うボランティア
- 1.3 ボランティア活動が地域、社会にもたらす影響

2 集団行動

- 2.1 集団、社会とは
- 2.2 相互行為の乱れ
- 2.3 乱れへの対処法

3 民主主義における社会関係資本の重要性

- 3.1 民主的な政府
- 3.2 社会関係資本重要性

4 活動と分析方法

- 4.1 PAZ MUSICA について
- 4.2 分析方法

5 結果と考察

- 5.1 分析結果
- 5.2 考察

おわりに

参考文献

はじめに

2007年12月、筆者は友人とともに、京都府京都市の同志社大学で音楽ボランティアサークル、PAZ MUSICA(パズムシカ)を立ち上げた。それから4年間、ただがむしゃらに活動してきた。しかし、振り返ると常に安定して活動への参加頻度を保っていたわけではなく、時期によって大きな差がみられた。その要因とはなんだったのだろうか。また、定義することが極めて困難なボランティアをサークルとして運営していくにあたって必要なものとはなにか、参加頻度を一定に保つために必要なこととはなにか。今回はとくに、大学生が集団でボランティア活動を行うことに限定して考える。

第一章では、ボランティアについて、第二章では集団での相互行為について、第三章では民主主義についての先行研究について記述する。第四章では自らのサークル活動について、また、調査の方法や分析方法を述べ、第五章で分析結果と考察を述べる。おわりにとして結論、今後の課題について述べる。

この研究は筆者の個人的な問題を多く含むことにはなるが、同じように感じている人がいるはずである。この論文が、これから団体でボランティア活動をしていく人々の役に立つと考える

ボランティア

1.1 ボランティアの定義

ボランティアとはなんだろうか。定義することが極めて困難である。『ボランティア学を学ぶ人のために』の著者、内海成治は、ボランティア活動の基本条件を三つとし、それら全てが含まれている活動こそがボランティア活動であるとしている。その三つの条件とは、自発性、無償性、公益性である。順に三つの条件について説明する。(内海ほか 1999)

まず自発性とは、ボランティアとは決して人に強要されるものであってはならず、自らが進んで行うものである必要があるということである。では、人に勧められて始めた活動はボランティアではないのかという考えも出てくるが、人間の起こす行動はそれまでに出会った人や物などなにかしらに影響を受けているものであると考えられるため、決してそうとは言い切れない(内海ほか 1999)。

次に無償性である。賃金を頂くために活動する仕事とは異なり、金品を求めて行う活動ではないということである。しかし、実際にボランティア活動をしていると、お礼にと謝礼金を頂くことや、ジュース、お弁当を出して頂くことが頻繁にある。それらがあるからこそ、依頼者の方の気兼ねなく依頼することができるという一面もあるため、一概に、依頼主からなにか一つでも頂いたらボランティアではないとも言いがたい(内海ほか 1999)。

最後に公益性である。公益性とは、社会になにかしらの良い影響を及ぼすものである必要があるということである。決して“自らがしたいことをする”のではなく、社会の人々が求めていることはなにかを考えながら行うことが必要である。

また、内海氏は、基本条件に加えて、充たしていればより理想的だという理想条件もあげている。それが、創造性・先駆性・発見性・相互間などである。このように、ボランテ

ィアの条件を定めていても人それぞれの価値観によってそれらが満たされているかどうかは異なり、線引きすることは大変難しい（内海ほか 1999）。

次に、ボランティアにはどのようなとらえ方があるのか。内海氏は、チャリティーのボランティア（他人のための道徳的行為）、自己実現のボランティア（自分のための文化的行為）、社会参加のボランティア（社会のための公的な行為）という三つのとらえ方ができると考えている。他人のための行為と自分のための行為とは、一見正反対で異なるかのように感じられるが決してそうではなく、他人のためにする行為が自分のための行為と重なる活動こそがボランティアと言えるのである（内海ほか 1999）。

1.2 集団で行うボランティア

次に、ボランティア団体をつくる意味についてである。メリットとしては継続性・安定性の向上、数の力の発揮、バランス感覚の向上、メンバー間相互の支え合い、活動への入りやすさなどがあげられる。一人で行っている活動であれば、本人が辞めてしまえばそれで終わってしまうが、団体であれば他の者が補い継続させることができる。また、数が増えることによって、できる活動の幅が広がっていく。デメリットとしては、仲間割れのおこる可能性があるということである。ボランティア団体では、集団内での関係調整が非常に難しいことがゆえる。意欲のギャップやペースの違いにより仲間割れをおこしてしまいやすいからである。どうしてかという、ボランティアとは個人のこだわりが強くでやすい。例えば、仕事であれば、皆の共通理念、第一の目標として“利益を得ること”、部活動などのスポーツであれば“勝つこと”などが掲げられている。ボランティア活動を行っている者にも、“誰かのためになにかをしたい”という共通の思いはあるものの、そのための手段や目標などは個人差が大きい。しかし決して誰が正しくて、誰が間違っている決めることは極めて困難であるため、他の人のこだわりを受け入れながら活動が続けていかななくてはならないのである。その時に、思い入れの強い人ほど辛くなるという減少が起きてしまうのである（内海ほか 1999）。

では、どうすれば団体に上手く活動が続けていけるのだろうか。そのためには、好きだから活動するという姿勢を核に、多様な思いや意欲の違いを受け止めていく必要があると考える。参加頻度の少ないメンバーに対しても、どうして私だけが大変なことをしなくてはならないのだろうと考えるのではなく、この活動が好きだから進んで色々なことをしている。他の人はその人なりのペースで活動をしているのだと切り替えて考えることが大切である。また、信頼を築き、透明で公開した組織を創ることも必要な原則であるといえる。どうしても他の事柄で忙しいときに、あまり活動に参加できなくとも、それまでに信頼関係が築けていれば、受けてのとらえ方は大きく変わる。互いの人間性をよく知り、認め合うことが団体に活動を行っていく上でなによりも大切なことなのである（内海ほか 1999）。

1.3 ボランティア活動が地域、社会にもたらす影響

ボランティア活動が地域、社会にもたらす影響について、山谷敬三郎が研究している。近年急激な都市化が進み、その結果人々のつながりや近隣との交流が弱まり地域の人間関係が希薄なものになっている中で、地域社会に潤いをもたせ人々が互いのつながりを深めるためには、どのような組織やグループの力が必要であるのか。幌加内町の「音楽ボランティアの会」の活動をもとに調査したのである（山谷 1999）。

その結果、音楽ボランティアが地域の中で活動することによって、地域の様々な場面で地域全体のコミュニケーションが深まり、活性化してきていることが分かった。例えば比較的小さな組織であっても、それが果たす役割が大きく、行政主体だけではなく、自主的な集まりであるこのような小さな団体だからこそ活動がしやすいと考えられる。小さな実践であっても、そのコミュニティには非常に大きな良い影響を与えていることが分かった（山谷 1999）。

2 集団での相互行為

2.1 集団、社会とは

二人以上の人間が共に居合わせたとき、そこにはもう、一つの社会、集団ができあがる。社会とは、人間と人間のあらゆる関係を指し、集団とは複数の人間の空間的、目的、心理的な集まりを指す。どちらにしても、それらにとって人間とは必要不可欠な存在であり、人間が集まることによって形成されている。そんな人間は誰も、個人的な価値観や自分自身を持っている。そんな自分自身のことを、アメリカの社会心理学者であるジョージ・ハーバート・ミードは“I”と表現した。彼いわく、Iとは生まれたそのときから現在に至るまで、様々な場面の中で築きあげられてきたものであり、この世の中に誰一人として全く同じIを持った人間は存在しない。60億人いれば、60億通りのIが存在するのである。そのIとは具体的にどういったものだろうか。Iとは、時にはその人の価値観であったり、その人の経験であったり、Iとは、容易に形に表せるものではない。よって、どれだけ仲がよくても、たとえ親兄弟、双子であったとしても、他の人間のIを全て理解することは不可能である。また、他の人間からはIが全て見えていることもない。そこでミードは、“me”という言葉を用いた。我々が普段見ている自分自身とは、自分の視点から自分を見る“I”の自分であり、他の人を通して見る自分、他の人あつての自分が“me”であるとしたのである。社会集団において、Iとmeはどのように関係してくるのか、また社会集団を成り立たすためにはどうすればよいのだろうか（Mead 1934=1973）。

2.2 相互行為の乱れ

まず、社会集団において、重要であるのは他の人に自分の意思を伝えることである。違った価値観、Iを持った人間が集まっているのだから、伝えられないことにはなにも始まらない。しかし、それは決してたやすいものではないことが先ほどの説明からも分かるだろう。いくらIを伝えようとするも、他の人はmeとして受け取ってしまうからである。どれだけ頑張っても、Iをそっくりそのまま他の人に伝えることはできないのである。

どんな人であっても自分からみる自分 I と、他の人から見られる自分 me の両方が存在していて、それは社会で他の人と関わる中で形成されていくものである。しかしその I や me の私は、普遍的なものではなく、その場の状況や年齢、一緒に過ごしている人など、その場その場で違うものでもある (Mead 1934=1973)。

では、より自分の I を他人に理解してもらうためにできることとはいったいなんだろうか。I を理解してもらうために、できることは、me をより I に近づけることである。そこで必要とされるのが相互作用であり、フィードバックなのである。相互作用とは二つ以上の存在が互いに影響を及ぼしあうことを指している。相互作用を行うことにより、me を I に近づけることができる。では具体的にどうすることが必要なのか (Mead 1934=1973)。

2.3 乱れへの対処法

では、どうすればこの流れを変えることができるのだろうか。そのためには、誰か一人だけが変えようとするだけでは変わらなく、伝える側、そして受け取る側の双方が意識することが必要とされる。そして、個人が新しい行動を試みたときに、その行動に気づき、その行動に対する新しいフィードバックを提供することにより、その個人の試みが強化される。そうすることにより、me はじょじょに I に近づくことができると考えられる (Mead 1934=1973)。

具体的には、人に“問う”ことが重要となるのである。誰かが意見を出したときに、もし理解できにくければ、どうしてそう感じたのかを問い、相手がどういった考えをもっているかをより理解できるようにし、互いに理解を深め、違っていった価値観をより近付けていく作業が大切なのである。そうすることで、ばらばらだった考えが次第に近付いていく。それぞれが他人のことを考えずに、自分の考えだけで動いたとすれば、決して循環はなりたたない。全員が、よく他人のことを見、考え、その上で最良だと思われる行動を考えて、行動を起こす。そうすることによって、少しずつみんなの理想が現実にと近付いていくのである (Mead 1934=1973)。

集団にいる全員が社会的想像力を働かせることが大切である。社会的想像力とは、個人的問題をたえず公共の問題に読み替え、公共の問題をそれがさまざまな人びとにとっていかなる人間的意味をもつのか、という形に翻訳することであったり、熟知している自らの型にはまった日常生活を新たな目で見直すために、当たり前のことから離れてものごとを考えることである。このような社会的想像力を社会、集団にいる全ての人々が働かすことが集団行動ではとても必要である。社会的想像力を働かせないことには、それぞれバラバラな方向性を持ってしまい、循環がうまく成り立たなくなる。それは、誰か一人でもかけたらそれは成り立たないのである (Mead 1934=1973)。

集団とは、二人という小集団であればまだやりやすく、その集団が大きくなればなるほど、難しいと感じてしまう。しかし、基本的なことは二人のグループであっても 60 億人のグループであったとしてもなんら変わりはない。一人一人が社会的想像力を働かせること、そのことについて考えていくことが、我々には必要とされている。また、社会相互関係について考えるときに忘れてはいけないことは、集中力を兼ね備えなければいけないこと、つまり、社会に対して関心を持ち、集中力ももって関わっていくこと、また集団という中で一つの共有した意見を持とうとする場合、グループ内の人全員がそのこと意識し、近づ

けようとする姿勢を持ち、よりよい関係を築いていくことが大切なのである（Mead 1934=1973）。

3 民主主義における社会関係資本の重要性

3.1 民主的な政府

民主的な政府がうまくいく要因、また逆に失敗する要因について考える。これは昔から人々の疑問であり、時宜を得たものである。人々は常によりきれいな空気、より確実な雇用、より安全な都市を求め、それに対する解決法を模索している。もちろん政府なしでこの手の難問に対応できると心底考えている人はいないだろう。では、どうすれば政府が統治という公的責任を順調に果たしうるのだろうか。この問題についての解を自信をもって知っている人と断言できる人は少ないだろう。公的諸制度は、政治や政府の実際にいかなる影響を及ぼすのか。制度を改革すれば、政治や政府の実際も改善されるのか。ある制度のパフォーマンスは、その制度を囲繞する社会的・経済的・文化的環境に左右されるのか。民主的な諸制度は、移植されても新しい環境の下で従前通りに育つのだろうか。また、民主主義の質は、民主主義の構成員たる市民の質に依存するのだろうか。だとすれば、市民は身の丈以上の政府など望みようがないのではないだろうかと考えられる。まずは、現代のイタリアの豊かな多様性を検討することから始める（Putnam 1992=2001）。

まずイタリアのセヴィソと南のピエートラペルトーザについて見る。セヴィソは1976年に、生態系に甚大な災禍をもたらした大惨事の現場として広く世界に知られた。公的統治という視点からすると、ピエートラペルトーザの多くの住民は一、二部屋しかないあばら屋に居を置きつづけている。また、水道や他の公共設備もなく、村人の多くにとってはせっぱ詰まった問題である。また、住人は経済学者が公共財や負の公共財と呼ぶ深刻な問題に直面していた。経済的・社会的・行政的資源の点で、この二つの町は劇的に異なっていたが、住民が政府の援助を必要としている点では変わりはない。1970年代初葉、行政課題についての主たる事業責任が、その他の市民関連事項ともども、ローマの中央政府から創設されたばかりの公選型州政府に突然移譲された。これらの町の住民達も要望を、ローマにではなく、近くのミラノやポテンツァに向けるようになった（Putnam 1992=2001）。次に、制度改革の過程がいかにして起こり、政治の実際の草の根レベルでの政府の質がどのように変わったのかを問う。州創設という試みに対する評価から始め、新制度の背景、当初二十年間の展開過程を検討することにより、この試みが制度論的アプローチに対して持つ含意を確認する。州創設なる制度改革は、制度論者が予想するように、諸政治アクターのアイデンティティを現実により変えたのか。それは、政治的諸資源の再分配をもたらしたのか、はたまた、新たな規範の内面化に成功したのだろうか、イタリアの統治に澱のように沈殿してきた昔ながらの諸慣行は、新制度の導入でいかに変容したのか、現実にもそうした諸慣行はなんらかの目に見える形で変化したのか（Putnam 1992=2001）。

イタリアでは、新生国家内に自治的な州政府を確立せよという声も少しはあったが、それ以前から存在した南北の格差より南部の後進性を恐れ、更には協会や農民の反動性を恐れ、近代イタリアの建国者の多くは、分権化がクン見の反映や政治的飛躍の足枷になる

と主張した。第二次大戦後初めて民主政治が到来し、極端な集権化に対して草の根レベルで強い反発が強まった。その結果再び地域主義的な感情が表面化しだしたのである。キリスト教民主党、社会党、共産党などの新生の強力な政党が歴史的に中央政府に抵抗し、一般論として分権化の拡充を求める議論を展開していた。これらの諸政党の指導下、1948年のイタリア共和国憲法は、直接公選の州政府の規定を設けた。しかし20年以上にわたり、憲法上の州政府規定は死文のまま放置され、国の中央統制が原則として生き残っていた。しかし戦後イタリアが猛烈な勢いで社会的・経済的变化を経験した1960年代半ば、制度改革を取り巻く情勢大きく変わろうとしていた。社会的・経済的变化と比べる、政治や統治の在り方は全くもって旧態以前としたものであった。だが、州政府の問題が、中央行政機構の動脈硬化症への不満の高まり、地域計画の必要性への関心の高まり、中央政界の左傾化によって再度浮上しだした。そうしてイタリアにおける統治のゲームのルールは、1970年以降20年の間に様変わりした。これらの制度変更は政治手法と統治の実際にどのような影響を与えたのだろうか。新しく発足した州制度が、州会議員の間に寛容かつ強力的なブラグマティズムを増進させた。州分権論者が期待していたように、州制度改革は、“新しい政治のやり方”を育んだと言えよう（Putnam 1992=2001）。

人間が創り出した制度の発展は、週、月、時には年単位で検討してみても、その軌跡をなかなか描けるものではなく、変化はゆっくりである。新しい制度を創設する者、またそれを評価する者には辛抱が必要になるということが、イタリアの州の実験によって学ぶことができた。州改革はイタリアの草の根政治に重大な影響を及ぼしてきたと言える。普通州の設置という制度の変更の結果、イタリアの政治リーダーは各人、別々のキャリア・パスを追及し別々の理念を支持し、別々の言葉で社会悪に取組み、別々の競争相手と争い、別々のパートナーと協力するようになった。ポジティブな面では、新制度は主唱者の思惑通り国民にとって身近なものと感じられるようになった。しかし、マイナス面としては、一部の州改革論者が期待した行政能率が具体的に表われていないことや、州改革によって南北間の昔からの格差がいつそう厳しさを増したという点である（Putnam 1992=2001）。

次に、20州各々の政策過程、政策表明、政策執行についての包括的かつ比較可能な評価を提示する。制度の成功・失敗の要因を調べる第一段階として、イタリア20州の政府を多様な角度から評価すること求められる。そこで、まずはじめに20州政府の有効性を測定する12の深針を個別的に検討する。次に、これら12の測度間の相関性を検討したうえで、州政府パフォーマンスに下した概括的な評価がいかに長期間にわたり安定したものであるかを問うた。最後に、評価と、イタリアの有権者、地域リーダーの考え方を州ごとに比較した。こうした厳密なプロセスは、制度の成功・失敗を理解するという目標にとって欠くことはできない（Putnam 1992=2001）。

たとえ政府が同じ構造、同等の法的・財政的資源を有していても、うまく統治される州もあればそうでないところもある。さらに、州ごとに一貫として変わるのは一般的な制度的有効性であり、単にある政府が今年は優れた保育プログラムを用意していたり、あるいは有能な予算策定官がいるとかいったレベルの話ではない。市民のみならず政治学者にとって最も緊要な検討課題の一つは、その理由を理解することでなければならない。何が制度パフォーマンスのこうした違いを説明するのだろうかを次に検討する（Putnam 1992=2001）。

制度パフォーマンスのこうした差異を説明する。どのような要因が、成功した北部と不成功に終わった南部を分けているのか。また、北部でも南部でも、同じ地帯に属する州の間で政府の出来・不出来が出てくるのはなぜかについて検討した。その結果、市民的文脈が制度の働き具合にとって重要であることが分かった。良き政府を説明するに当たって、ある州の社会的・政治的生活が市民共同体の理想にどれほど近いかという点が、図抜けて重要な要因なのである。では、なぜ州によって市民性の度合いに差が生じたのかだろうか。

制度パフォーマンスと市民共同体との強い関係は、市民性の程度が州によってなぜ異なるのか。その結果、一世紀も前の市民的な積極参加のパターンを知れば、驚くほどの正確さで1980年代のイタリアの州政府の成功・失敗を言い当てることができた。市民的な州は11世紀以来確実により市民的でありつづけたのである。囚人のジレンマが存在する世界では、合理的な個人は、強力的な共同体によって州王的ジレンマの限界を超えることができることが考えられる。協力維持に欠かせないのが信頼である。その個人的な信頼は、どのようにして社会的な信頼となるのであろうか。社会的信頼は、相互に関連する二つの源泉、互酬性の規範と市民的積極参加のネットワークから現れる可能性がある。いかなる社会にあっても、集合行為のジレンマが政治、経済を問わず相互利益を求めて強力しようという試みに水をさす。第三者による強制は、この問題にとっては適切とは思えない解決法であり、地域社会でその成員が自発的に強力し合うかどうかは、その地域社会に社会資本が豊に存在するか否にかかっている。一般化された互酬性の規範と市民的積極参加のネットワークは、裏切りへの誘因を減らし、不確実性を低減させ、将来の協力にモデルを提供することで社会的信頼と協力を促進する。20世紀後半に市民的関与の花が咲いた州は、19世紀に協同組合や文化団体、相互扶助協会の豊かさでは抜きんでおり、12世紀には、近隣組織、宗教団体、同職組合がコムーネ共和制の開花に一役買っていた地域とほぼ正確に重なる。市民的伝統の驚くべき閣僚率は過去の力を証明するものである（Putnam 1992=2001）。

最後に、市民的な積極参加の規範とネットワークが、実効的かつ応答的な政府に対してこれほどまでに強い影響を与える知友と、市民的伝統の長期の安定性の原因とはなにか。社会的文脈と歴史は制度の有効性を深い所で条件づける。州の土壌が肥沃なところでは、州はその伝統から栄養分を引き出すが、土が貧しいところでは新しい制度はたじろぐばかりである。有効で応答的な制度は、市民的人文主義の用語で言うところの共和的な徳と実践に依存する。民主的な政府は、政府が活力ある市民社会と面と向き合うときに強くなる。

市民共同体の市民はより良い政府を期待し、彼ら自身の努力を通じて良い政府を手に入れる。その中で、“貴方が私よりも強いので、貴方にこれをしてあげる”でも、また“貴方が今私にXをやってくれるなら、私も今貴方にYをしてあげる”ではさらになく、“将来貴方が私に何かをしてくれると思っているので、今貴方のためにこれをしてやる”といった互酬性が高次の社会資本を生む。イタリアの経済史家ヴェラ・ザマーニは、国のイニシアティブに頼るよりも地方の諸構造の地方における変革を主張し、政治的・文化的革命に必要とされるのは長期的な時間的パースオエクティブであると言っている。社会資本の構築は容易ではないが、社会資本は、民主主義がうまくいくための鍵となる重要な要素であるのである。（Putnam 1992=2001）。

3.2 社会関係資本の重要性

人と人のつながり＝「社会関係資本」が、幸福な暮らしと健全な民主主義にとっていかに重要であるか。強いアメリカを支えた“市民的つながり”の減少は、いつ・どこで・なぜ起こったのだろうか。現代政治の機能不全の醜悪さと、巨大で抵抗し難い集合プロジェクトの欠如によりおそらく、人々はエネルギーを伝統的な政治から、フォーマル性の低い、自発的で、効果的なチャンネルへと振り向けてきた。多くの米国人が自分は様々な組織のメンバーであると自称し続けているが、しかしほとんどの者はコミュニティ組織にもはや多くの時間を割かなくなっている。米国人は単に政治的生活のみからでなく、組織生活全般から、大挙してドロップアウトしつつあるのである。いくつかの考えられうるコミュニティに関して例をあげる（Putnam 2000=2006）。

まず宗教とは、米国におけるコミュニティ生活とその健全性における中心の源であり、信仰を基盤とした組織は、直接には成員への社会的サポートとコミュニティへの社会的サービスを提供することによって、間接には市民的スキルを育み、道徳的価値を繰り返し説き、愛他主義を奨励し、協会に集う人々の市民社会への動員を促進することによって、市民生活に奉仕している。しかし、若い世代の大半は、その前の世代が同じ年であった時よりも、宗教的、世俗的社会活動への関与を減らしている。21世紀の幕開けにあたり、米国人は教会に行かなくなり、また通う教会もそれから広がるコミュニティへの関わりを減らしつつある。宗教生活におけるこの傾向は、世俗的コミュニティにおける社会的つながりに見られる減少を強化してしまっている。次に職場であるが、職場は自ら他社との関係を形成する場になる。しかし、21世紀の幕開けにあたり、米国人はその親世代に比べて、同僚と共にフォーマルな組織に加入することが減ったことが実証された。加えて、米国人の三人に一人を占める未就労の人間にとっては、職場のつながりは存在しないため、職場は疲弊しつつある市民社会にとっての救いではないのである。大半の米国人は数え切れないほどのインフォーマルな仕方で繋がっている。しかし、単に善行のための市民活動に関わらなくなったのではなく、インフォーマルなつながりすらも行われなくなったのである。しかし、ミレニウム世代から、新たなボランティア精神がわきあがってくる、ということが期待できる。この青年期のボランティア精神が成人後も続き、個人的な介助奉仕から、社会的・政治的問題への広範な参加へと拡大を始めたならば、米国は市民性再興の新たな時代の局面にたっているということになるのかもしれない（Putnam 2000=2006）。

このように、市民参加の低下傾向に対抗する明らかな例外となっているのは、青年ボランティアの増大、テレコミュニケーション、特にインターネットの成長、副音主義保守派の草の根活動の活発な成長、そして自助サポートグループの増加である。これらの多様な逆流は、社会が同時進行で複合的に発展していくということを想起させる貴重な存在である。しかしそれでも、米国人の大半が20～30年前と比べてコミュニティのつながりを多くの点で失っているということよりも、これらの発展の影響が大きいということにはならない。改善のための方法の可能性を探る前に、引き潮の起源を理解する必要がある。20世紀の前半3分の2の特徴であった、市民精神あふれる傾向が、この数十年で逆転した理由を説明できるものは何かを次に考える（Putnam 2000=2006）。

過重労働から郊外へのスプロール現象、福祉国家から女性革命、人種差別からテレビ、移動の拡大から離婚の増加といった、広範にわたる可能な説明要員について探る。それに

より、直面する問題に対する三つから四つの決定的要因を同定することができるだろう。現在でも米国においては、他の多くの諸国よりも市民的参加の度合いが高い。しかし、相互のつながりは減少してしまっている。人々は今でも、公共の風景を、関心を持ちながら、また批判的に眺めているものの、自らが参加しようとはしないのである。なぜこのような変化が起こったのか、市民参加の的かが、時空を超えて、どのような社会的特性と関連しているのか探すと、そこには二つの弱点がある。一つ目は、社会変化によって引き起こされた影響は最初の接触地点からしばしば広がってしまうということである。二つ目は、いつもの容疑者のふるい分け作業において、初期候補リストの中に突き出して目立つものはないことである (Putnam 2000=2006)。

原因として考えられうることの中に、まず時間と金銭面でのプレッシャーがあり、その中には共稼ぎ家族にのしかかる特別なプレッシャーを含むが、これが社会およびコミュニティへの関与現象に目に見える寄与をしている。コミュニティ問題からのドロップアウト傾向の背後にいる、最も明らかな容疑者は、多忙の拡大であると考えられる。おそらく問題の元凶は、単純に過重労働だろう。そしてこれに関連している市民参加手以下の潜在的原因は、一部で広がる経済的プレッシャー、雇用の不安定化、実質賃金の低下であり、とりわけ所得分布の下位 3 分の 2 においてみられる。それらが一体となって市民参加手以下の主要な原因となっていることが考えられる。しかし、手に入った証拠の示すところでは、忙しさ、経済的困難さ、そして共働き家族に伴うプレッシャーは、社会的つながりの低下の説明要因としてはそれほど大きくないことが分かった。これらのプレッシャーは、過去にコミュニティ関与の責任を過大に負わされていた、得に高学歴の女性の人々をターゲットとしており、その意味でこの展開には、それらの人々自体を超えて広がる相乗効果がある。教育を受けた、活動的な女性で市民活動を組織したり、ディナーパーティを計画したりといったことに使える十分な時間を持つ人が少なくなるに連れて、残りの人々も、次第に参加が減少していったのである。また、時間のプレッシャーも経済的困難さも、女性の有給労働力への移動も、過去 20 年の市民参加低下の主要因ではないことが分かった。筆者の推定では、これらの要因による低下は全体の 10% にすぎない。第二に、郊外化、通勤とスプロール現象も、補助的役割を担っている。これは、時間と金銭面でのプレッシャーと同様に、全国的な市民参加手以下の説明に寄与する。しかし、低下のうちわずかな割合しか説明できないのは、市民参加低下はスプロールの影響をいまだ受けない章としや農村部でもやはりしっかりと観察されるからである。これらの要因全てによる影響も、問題の全体のさらに 10% を説明する程度だろう。第三に、電子的娯楽、とりわけテレビが余暇時間を私事化したという影響は重要である。テクノロジーとマスメディアの影響として、新しい娯楽の利用者は孤立し、受身的で、コミュニティから切り離されてはいるが、だからといって、テレビがなくなれば社会的になるのかということ、それは定かではない。この要因はおそらく低下全体の 25% 程度を説明するというのがおおよその推定である。第四の最も重要な要因は世代的变化であり、長期市民世代が、関与の少ない子や孫によって取って代わられるという、ゆっくりとではあるが着実に不可避の置き換えは非常に強い要因であった。この要因は低下全体の半分以上を説明すると考えられる。これらが低下の要因に関与していることは明らかであるが、残りの要因については未だ説明されておらず、謎のままである (Putnam 2000=2006)。

これらから、市民参加低下の犯人を探ろうとしてきた取組みは実り多かったとはいえ、決定的なものではなかった。20 世紀後半の 3 分の 1 を通じた米国における市民参加の低下はその多くが、著しく市民的な世代が、コミュニティ生活への組み込まれ方の少ない数世代によって置き換わったことに起因する (Putnam 2000=2006)。

社会関係資本は、人々の生活の多くの側面に対して、強い、そしてはっきりと測定可能な影響力を及ぼすことが明らかとなる。学校や近隣県警が、コミュニティの結束が弱まっている状況ではうまく機能しないこと、そして経済、民主主義、更には健康や幸福までもが、社会関係資本の十分な蓄積に依存していることを、確たる証拠によって示す。その結果、さまざまなレベルで社会関係資本は相互に強化し合うことが分かった。友人や家族と手を伸ばしているものは、コミュニティを超えた広がりの中でもまた、しばしば最も積極的である。しかし、これは常に当てはまるわけではなく、友愛対友愛のジレンマはこの問題の一面を強調している。我々の抱える最大の集合的問題に対しては、まさに橋渡し型の社会関係資本が必要とされるが、それは作り出すのが最も難しいものなのである (Putnam 2000=2006)。

米国における信頼とコミュニティの絆を回復するのに必要なものは個人的な変化なのか、それとも制度的な変化なのか。答えは“両方”である。米国の主だった市民制度は、公的なものも私的なものも、その大半がつくられてから 1 世紀が過ぎていささか古びてしまっており、更なる積極的参加がもたらされるように改善する必要がある。しかし結局のところ、全ての市民が、友人や隣人と再びつながろうと決意しなければ制度的改革も機能しないどころか起こりすらしないのである。我々が自ら行動することが必要とされる。それが我々のためになるだろうからである (Putnam 2000=2006)。

民主的な政府をつくるためには、単にルールを定めるだけでなく、長い歴史の中で人と人との繋がりを強化する必要性が求められる。時代の流れとともに、人と人のつながりは薄れてきているものの、どの時代であれ、決してなくなるものではない。互酬性をもち、長期的な目での改革が必要となる (Putnam 2000=2006)。

4 活動と分析方法

4.1 PAZ MUSICA について

PAZ MUSICA は様々なボランティア活動の中でも“音楽”に特化したボランティア活動を行っている。音楽ボランティアとはここ近年で生まれた言葉である。はっきりとした定義はなく、全般的に音楽を通じたボランティア活動のことをさす。ボランティアという単語は広く認識されているが、音楽ボランティアという単語はあまり認識されていない。筆者自身、音楽ボランティアを行っていることを周囲の人に告げても理解してもらえないことも多く、我々がどのような活動を行っているのか説明することが多々あった。そのため、調査について記述する前に PAZ MUSICA 立ち上げの背景、また、PAZ MUSICA の行っている活動について説明する。

4.1.1 立ち上げの背景

京都京田辺市にある同志社国際高等学校、2006 年の冬にこの団体の大元となる「引退一ず」が結成された。これは、吹奏楽部を引退した三年生数人が、音楽を続けながらなにか人のためにできることはないかと考えできたものである。筆者は当時、吹奏楽部ではなければメンバー内の誰とも仲良くなか、引退一ずには入っていなかった。そんな筆者とメンバーを結びつけたのが“ボランティア”という授業であった。同志社国際高等学校では、とりたてて授業を選択できる制度があり、このボランティアもその一つであった。学年でおよそ 10 分の 1 の人が選択していた。それぞれ異なった理由であるとはいえ、ボランティアに何かしらの興味を抱いた人の集まりである。筆者はその授業内で引退一ずへと勧誘されて入った。その後も人数は増え、卒業までにはおよそ 20 人になっていたが、大学生になると、皆他にやりたいことができ、次第と人数は減り、2007 年の PAZ MUSICA 立ち上げの時には 8 人になっていた。2011 年現在では、1 年生 11 人、2 年生が 20 人、3 年生が 6 人、4 年生 15 人の、計 52 人で活動している。同志社大学と、京都府京田辺市の社会福祉協議会に所属している音楽ボランティア団体である。活動費用は、年会費として全員から 1000 円集める他に、ボランティア先の方々からご厚意で頂く謝礼金などである。

4.1.2 PAZ MUSICA の活動

音楽を通じた活動を中心とする。しかし音楽性の追求よりも、相手に楽しんでもらえる事を重視する。通常のバンド演奏とは違い、相手に合わせた選曲をし、お客さん参加型（クイズ形式にしたり、お客側の人も歌ったり、音をならすなど一緒に楽しむ事を目的にする）の演奏を行う。具体的には、子どもにはディアズニーやジブリなどのアニメソング、手遊び歌などである。また、音楽活動とともに、相手側の了承がいただければ、掃除、一緒に遊ぶ、話をするなどの活動も行う。音楽ボランティアの活動を深くするために、学習することが必要であると考え、音楽抜きの活動も行う。例えば養護学校で子ども達と遊ぶ活動や、地域の祭りのお手伝い、清掃活動などである。活動の依頼は、所属している京都京田辺市の社会福祉協議会を介した依頼の他、メンバーに直接依頼していただくことも可能で、幼稚園や児童館などでの活動が多いが規定しているわけではなく、依頼主との話し合いの上お受けするかどうかを決める。音楽は人を楽しませたり温めたりできると実

感じ、それを求めてくれる方々のところで、音楽を通して楽しい時間を共有したいという考えのもとで活動している。

4.2 分析方法

2007 年 4 月から現在までの活動を筆者の記憶や、残っていた活動記録などを元に思い出しログをつけた。ログはエクセルを使用し、印象に残っている出来事別に、詳しい状況説明とその時の筆者自身が感じた思いを記入。ログが全てつけ終わった後、ログの中に複数回出てくるキーワードを選び、キーワード毎に何度出てきたかを集計する。集計した結果を、コレスポネンシ分析を用いて分析した。ここで、コレスポネンシ分析とはなにかを述べる。

コレスポネンシ分析とは、集計済みのクロス集計結果を使って、行の要素（クロス集計という表頭にある項目）と列の要素（表側）を使い、それらの相関関係が最大になるように数量化して、その行の要素と、列の要素を多次元空間（散布図）に表現するものである。コレスポネンシ分析の目的の一つは、低次元空間にコレスポネンシテーブル中の二つの名義変数間の関係を記述し、同時に各変数のカテゴリー間の関係も記述することである。この解析手法を考案したのは、フランスのベンゼクリであり、日本では対応分析や、対応解析、符号解析とも呼ばれている。

具体的な作業としては、まずクロス集計を行って結果を出力する。その後、集計結果をもとに、SPSS ワークシート内に記録する。ワークシートへの投入が完了したら、解析を実行し、散布図に出力されたポジショニングデータを見て、変数間の差や類似性を視覚的にとらえる。

表 1 は、カテゴリーとログのクロス表である。ログからキーワード抽出し、それをカテゴリーとして使用した。表 1 はログの中にキーワードがいくつあるかによって、どのカテゴリーになるか分類している。

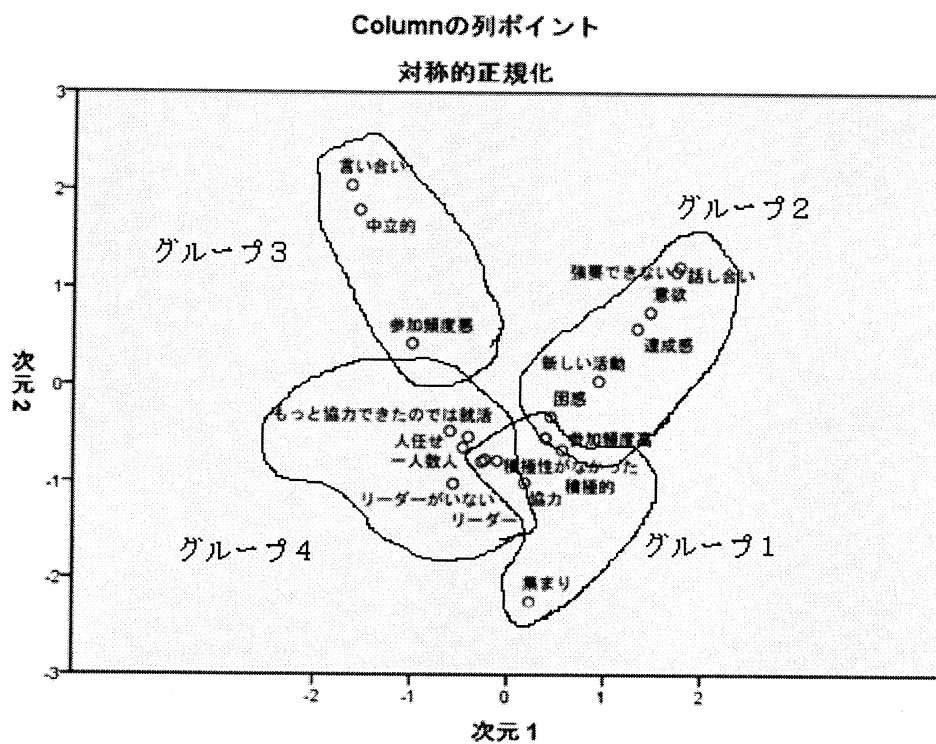


図 2 Column の列ポイント

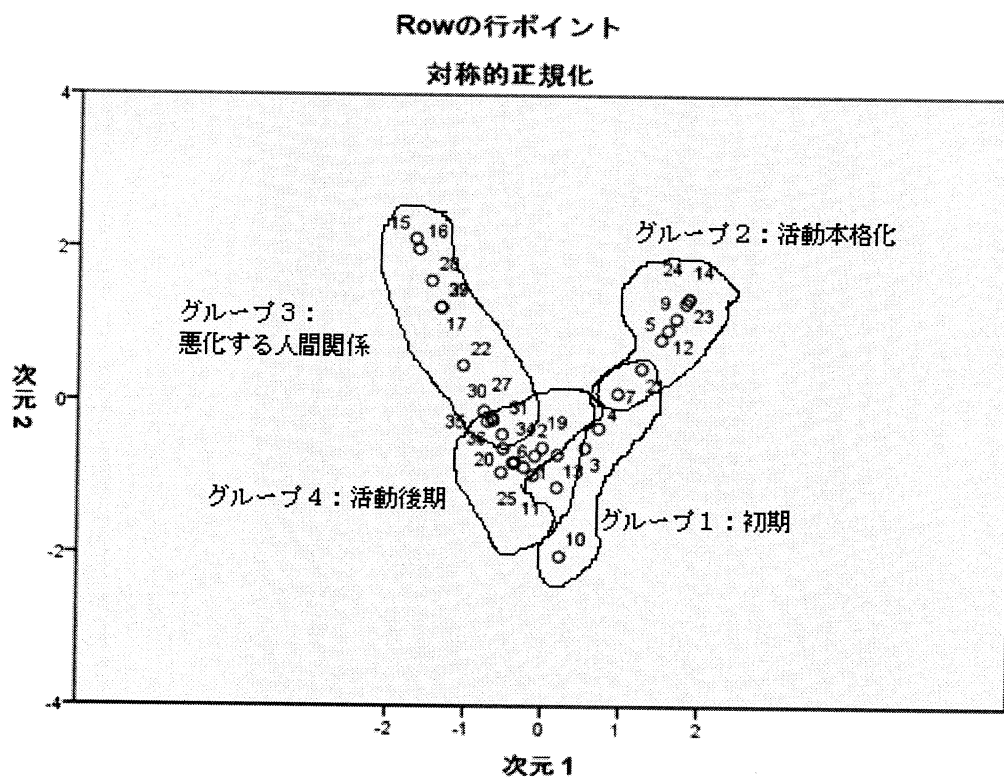


図1 Rowの行ポイント

表2 グループとカテゴリー

	グループ1：初期		グループ3：悪化する人間関係と参加頻度の減少
B	積極性がない	P	言い合い
A	積極的	D	中立的
M	集まり	O	参加頻度悪
E	協力		
H	人任せ		
G	一人（数人）		
F	もっと協力できたのでは		
R	リーダー		
	グループ2：活動が本格化し始めて起きること		グループ4：活動後期
C	強要できない	B	積極性がない
I	話し合い	R	リーダー
J	意欲	Q	リーダーがいない
L	達成感	H	人任せ
S	新しい活動	G	一人（数人）
K	困惑	F	もっと協力できたのでは
N	参加頻度高	T	就活

表2は、図1、図2を参照し、カテゴリーをグループ1からグループ4に分類したものである。

5.1 分析

散布図に出力されたポジショニングデータを見て、変数間の差や類似性を視覚的にとらえる。はじめに、図1と図2の関連から、活動の流れを検討した。

図1は、1～39番まで、時系列に並べている散布図である。番号をたどってどのような移行の仕方をしているかを見ると、中心下から右上に向かって移行し、その後左上へ、最終的にはもう一度中心下に移行していることが分かる。時期に当てはめてみると、1～11番、活動開始初期の2007年頃は中心下（グループ1）、12～14番、2007年から2008年頃にかけてはグラフの右半分（グループ2）に移り変わる。その後、点は左上（グループ3）へと移り、15～40番、2009年から2010年頃には初期のころと同じ辺り、中心下（グループ4）に移行している。グループ1とグループ4はいくつかの同じカテゴリーを含んでいる。

次にそれぞれのグループに関連づけられたカテゴリーを示し、そこにみられたログを要約する。また、ログの主要な部分を具体例として提示する。

表3 グループ1

カテゴリー	内容
A:積極的	みんなで支え合いつつ協力できていたと思う。メンバーのほとんどが積極的に活動に参加していた。
B:積極性がない	入ったばかりで、どう接すればよいのか分からず困惑。積極性がなく、人任せにしていた。
M:集まり	皆で協力してアルバムを作りあげた！このころはよく誰かの家に集まったりしてたなあ。 皆で集まってアルバム作り。
E:協力	私言い出しで、作った。絵が下手な私だけど、多田の協力があってすんなり作れた！ 初めての音楽拔きのボランティアで困惑するものの、皆で協力しあいながら新しいことにチャレンジできた。
F:もっと協力できたのでは	誰かがしてくれていると、人任せにしていた。もっと協力できることがあったはず。 皆の協力が必要なことがなかなか進まない。
G:一人（数人）	初期からいるメンバー数人が話しを進めてくれる。 メールの管理はほぼ大原一人で担当。 書類はほとんど大原一人が手続き。
H:人任せ	どこかで、人やってくれると思っていた。人まかせ。 入ったばかりで、どう接すればよいのか分からず困惑。積極性がなく、人任せにしていた。 書類のことなど全部人任せにしてしまっていた。

表3を分析すると、初期の頃の筆者は、“もっと協力できたのでは”と感じたり、“集まり”には積極的に参加することから意欲があったことわかる。しかし、初めて行う活動や、信頼関係を築きあげていないメンバーとの関係に対して不安があり、積極性に欠いていた。カテゴリー別に分析していく。

B、積極性がないは初期の頃は、途中参加のため分からないことも多く、どこまで踏み込んでよいのか分からない気持ちである。この積極性のなさは、決して意欲が低いわけではなく、新しいことに取り組むことに臆病になっていたからではないかと考えられる。

A、積極的は、時間がたつにつれ少しずつ自分のやりたいことが分かり、積極的に参加す

るようになる。ボランティア活動だけではなく、それまであまり打ち解けられていなかったメンバーたちと打ち解け始めたことも、積極的になれた大きな要因だと考えられる。

M、集まりは、皆積極的に活動に参加したり、話し合いをしていたため、この時期には集まりが多かった。集まっていたときに意欲も高く、参加頻度も高かった。人と人がコミュニケーションを図ることによって良い循環がうまれていたのだと考えられる。“話す”ことの重要性を痛感する。

E、協力は、分からないことが多いからこそ、皆で協力できていた。皆があまり忙しくなく、頻繁に集まったことでメンバー内の交流が盛んだったことも大きな要因だと考えられる。

F、もっと協力できたのでは、分からないことを言いわけに、人任せにできてしまった。

G、一人（数人）は、主に一人、または数人しか活動していないことが多々あった。

H、人任せは連絡や事務作業など、大変なことは人任せにしていた。分からないことは見ぬふりをしていた。

表4 グループ2

カテゴリー	内容
C:強要できない	花見をしないのはいいが、通常の飲み会は強制的でなければあってもいいのではと思った。
I:話し合い	新入生を勧誘するかどうかの話し合いを続ける。 つばささんの件をきっかけにそれぞれがボランティアについて考えだす。週に1回ミーティングを持ち話合うも、それぞれ異なり答えは出ず。 私達に反省すべき点が多くあった。ボランティアってなんなんだろう？メンバー内で話しあうきっかけにもなった。 答えは出ないものの、他の意見を聞けることがためになったように思う。自分一人の意見にとらわれがちだが、さまざまな考え方があり。正しい、間違いではない。これらをどうまとめていくかが課題。
J:意欲	サッカーサークルを抜けつつ参加。それぞれ事情はあるが、協力しつつなんとかやりきった！達成感！あまり参加していない人がいても、意欲は感じられたからこそ上手くいっていたんだろうな。
K:困惑	新しいことで困惑は多かったが、皆意欲的に参加していた。
S:新しい活動	新しく始めた活動に意欲がでる！ 新しいことで困惑は多かったが、皆意欲的に参加していた。終わったあとの達成感は最高！！
L:達成感	新しいことで困惑は多かったが、皆意欲的に参加していた。終わったあとの達成感は最高！！ 協力しつつなんとかやりきった！達成感！
N:参加頻度高	大原がリーダーシップをとってくれていたから成り立っていた。参加率はよかった。 皆で支え合いつつ協力できていたと思う。メンバーのほとんどが積極的に活動に参加していた。

表4を分析すると、少しずつ活動が盛んになるにつれて、皆の中に葛藤や新たな感情が芽生え始めたところがわかる。新しい活動や他の人との価値観の違いに戸惑うこともあったが、だからこそ積極的に話し合い、互いに理解し合おうとしていた。活動への参加頻度がじょじょに高まっていく。カテゴリー別に分析していく。

C、強要できないは、積極的に活動を行っていく過程で、内部で意見の食い違い等がでてきた。意見の食い違いは、積極的に参加していない時には生じにくいと考えられることである。しかし、ボランティアという自主性に重きをおいている活動であるということを考えると、部活動やアルバイトのように参加や価値観を強制することができなく、そのことにもどかしさを抱いていた。しかし、強要できないからこそ、じっくり話し合いを続けるため、様々な価値観を知ることができ、またそれはそれぞれの意欲を掻き立てた。

I、話し合いは、意見の食い違いを無理に統一することはできなかったため、この時期にはよく話し合いを行っていた。話し合いから様々な葛藤ができるのも確かではあるが、他の人の価値観に触れることは、改めて自分自身をみつめる機会でもあり、活動への意欲をわきたてた。

J、意欲は、話し合いをすることで、他のメンバーのボランティアに対する考えなど新しい価値観を知る。それはそれぞれの活動への意欲を高めた。

K、困惑は、新しい活動にとりくむときや、話し合いなどによって新しい価値観に触れたときに困惑した。しかし困惑することには、マイナス面ばかりではなく、分からないからこそもっと知りたい、と意欲を掻き立てることも多くあった。

S、新しい活動は、困惑することがあるも、意欲が高まるにつれ新しい活動を積極的に行っていた。京田辺市のイベントに参加したり、養護学校に行ったりなどし始めた。

L、達成感、得に新しいことをやり遂げたときに感じるが多かった。困惑することが多い時ほど、活動が円滑に進み、人の笑顔を見れたときにより達成感を感じた。また一人ではなく、仲間がいるからこそ、達成感が大きくなっていたのではないかと考えられる。皆で喜びを分かち合う楽しさが団体にはある。

N、参加頻度高は、集まり、話し合いなどが多く意欲が高い時期、1～2 回生の時期には参加頻度が高かった。

表 5 グループ 3

カテゴリー	内容
I:言い合い	多田、大島が些細なことから言い合いになり、多田がサークルに来なくなる。詳しい話は周りに明かされず。
D:中立的	大島の意見しか聞かなく、どちらが悪いかなんて判断できなかった。けど、多田に話を聞こうともせず、中立的な立場でいた。
O:参加頻度悪	3年生は就活を理由にほとんどいけず。

表 5 を分析すると、この頃には、他の人の価値観をうけいれられずに言い合いに発展することが多々あったことが分かるその頃の筆者や他の数名は、言い合いに参加せず中立的な立場をとっていた。その結果、辞めていく人が増えたり、就職活動を言い訳に、活動に参加する人が減少していった。カテゴリー別に分析していく。

I、言い合いは、参加頻度が大変よく、話し合いが多かったからこそ、価値観の違いから言い合いになることもあった。それぞれの価値観であると、お互いが落ち着いて話すように心がけてはいたものの、どうしても他人の意見を受け入れられなく、激しい言い合いになることも幾度となくあった。言い合いの結果、辞めていった人も数人いた。活動開始初

期に比べて、メンバー同士が仲良くなるにつれ、集団にとってなによりも重要である相手を思いやる気持ちが薄れてしまっていたのかもしれない。

D、中立的は、言い合いがおきたときに、筆者はどちらの見方もせずに中立的な立場でいた。今考えると、ただ安全な場所にいたかっただけで、本気で人の意見に耳をかたむけられていなかったのかもしれない。結果、辞めていく人を引きとめることもできずにただ傍観していた。この筆者の行動が、参加頻度を減少させた大きな要因の一つであると考ええる。

O、参加頻度悪は、言い合いをきっかけに辞めていった人が二人いた。二人とも、サークル結成の初期メンバーであり、中心的役割を担っていたメンバー達であった。また、3回生が就職活動を始めたことから一気に参加頻度が悪くなる。面接などとかぶり、行けない日があったのは確かだが、本当に行ける限り行っていたわけではなかった。それまで中心的役割だった2人のメンバーも辞めていき、残った中立的立場のメンバーは就職活動を言いわけに参加しなくなっていた。

表6 グループ4

カテゴリー	内容
R:リーダーがいない	私を含め、リーダーがいなかった。皆他人任せだった。 誰からともなくEVE祭に屋台を出す話が出るものの、計画倒れ。 みんな撮りたいとはいってたものの、いざとなると誰も動かず。
Q:リーダー	はっきり怒るときは怒るリーダー、多田のおかげでメリハリのある練習に。参加人数も多い。
T:就活	後輩が大変なのに気づきつつも就活を言い訳に参加していなかった。 皆で支え合いつつ協力できていたと思う。メンバーのほとんどが積極的に活動に参加していた。
F:もっと協力できたのでは	3年生を中心に動いてくれた。先輩としてもっと協力できることがあったんじゃないかと思うが、しなかった。
G:一人(数人)	ほぼ1、2年生のみ。4年生は人任せにしていた。
H:人任せ	どこかで、後輩がやってくれると思っていた。

表6を分析すると、リーダー的存在のメンバーが辞めたことや、4年生が就職活動を始めたことをきっかけに4年生の参加頻度は急激に減少する。カテゴリー別に分析していく。

R、リーダーがいないは、リーダー的存在であったメンバー達が辞めてしまい、残った4回生は中立的な立場を保つメンバー達であった。そのため、イベントなどを企画はしても、統括することができずに企画倒れすることが多々あった。

Q、リーダーは、統括する人がいる時に活動は円滑に進んでいた。また、新しいイベントなどは言いだしてから最後までやり切るためにしきってくれるリーダー的存在が必要であった。4年生内のリーダー的存在のメンバーはすでにやめてしまっていたため、後輩のメンバーがリーダーとして活動してくれる。

T、就活は、3年生の秋から就活を理由に参加頻度が一気に低くなる。必要以上に言いわけとして使って、後輩任せにしまっていた。

F、もっと協力できたのでは、就職活動を言いわけにほとんど参加できていなく、今ではとても反省している。時期によって協力し合っている時期とできていなかった時期の差が

大きく、ボランティアへの積極性、自主性、意欲などをコンスタントに持続させる難しさを痛感する。

G、一人（数人）は、主に一人、または数人しか活動していないことが多々あった。この時期はほとんど後輩任せである。強要されることではないため、他のことで忙しい時には活動が後回しになっていた。

H、人任せは、大変なこと、辛いことをよく人任せにしていた。連絡や事務作業には関わらず、活動に参加するメンバーが多かった。楽しいことだけをしていたいと都合が良かったのだと考える。

5.2 考察

この分析から明らかになった点は、リーダーの存在とコミュニケーションの取り方が活動への参加頻度に大きく関連しているということである。

しっかりと活動をしきるリーダーがいるときに、参加頻度が高くなっていることがログから読み取れる。しかし、グループ3以降、リーダー的存在の人達がやめてからは、参加頻度が減少し、企画倒れとなった計画が多々あった。

これらからわかるように、リーダーとは活動を円滑に進めていくためには大変重要な役割なのである。リーダーがリーダーとしてあり続け、良い潤滑油であるためにも、周囲のメンバーも決してリーダー任せになるのではなく、積極的に活動に参加し、相手を思いやる気持ちを大切にすることが必要である。また、リーダー自身も、自分だけが頑張っているのではないかと他の者を不満に思ったり、他の者の価値観を否定しないように、人を思いやる気持ちを持ち続けることが大切である。

また、話し合いは参加頻度や意欲を高める役割をし、言い合いは参加頻度を減少させる役割をしているため、話し合いや言い合いというメンバー間の“コミュニケーション”が参加頻度に多大な影響を与えていることが分かる。筆者は、同じコミュニケーションの一つでも、話し合いと言い合いを、区別した。話し合いとは、相手の意見に耳を傾け、異なった価値観をすり合わせていこうとすることであり、言い合いとは、相手の価値観を否定することである。ボランティアとは定義することが極めて難しく、広範囲の意味を持つため、人それぞれ異なった価値観を抱いている。それらの価値観には、それまでのそれぞれの人生観や理念なども関わっているため、統一することも難しく、意見の食い違いがよく生じる。そんな時に、相手の価値観を理解した上で互いの価値観をすりよせていくこと、自ら歩み寄ろうとし落ち着いて話し合いをする必要性がわかった。グループ3の頃の我々は、“話し合い”をできなかったことが、その後の参加頻度を減少させた大きな要因であると考えられる。また、特に筆者に限定していうと、常に中立的な立場で傍観していなかったこともその要因の一つであると考え。一人一人が社会的想像力を働かせること、そのことについて考えていくことが全員に必要とされているのに、面倒なことに巻き込まれたくないと怠ったがために、フィードバックの循環をとめてしまっていたと考える。

おわりに

団体でのボランティア活動を支えるものとは、リーダーの存在とコミュニケーションの取り方であることが分かった。しかし、大学生とは本業が学問であり、将来のために多くのことを学びたい時期、4年間ずっとリーダーで居続けられる人がいるとも限らなければ、上手くコミュニケーションをはかれないことも多く、活動への参加頻度をコンスタントに一定に保つことは極めて難しい。4年間の中で参加頻度が多少変わってしまうことは仕方がないとも筆者は考える。しかし、大学生にも団体で活動するメリットがある。一概にはいえないものの、大学生活4年間の中で、1~2回生は比較的時間に余裕がある人が多く、3回生以降になると、就職活動や海外留学、資格取得のための勉強など、卒業後を考え他にしたいことが増えていくことが多いと考えられるため、忙しい時期がずれるのである。

しかし、メンバー全員が常によりよいサークルにするためにはどうすればよいのかを問いつけること、そのために他のメンバーを思いやる気持ちを持ち続ける努力をすることが必要である。他の人の意見に耳を傾け、自らの意見とすり合わせていく相互行為の必要性、難しさも改めて感じた。

大学生が集団としてボランティア活動を行うこと。忙しさ、お金のなさなどを考えると決して楽しいことばかりではない。人と関わることも多いゆえ、大きな責任もともなう。それでも、誰かのためになにかしたいと思う人、人と関わるのが楽しくて仕方がない人、人の笑顔が見たい人、自分自身が笑顔でいたい人。なにか一つでも当てはまっている人、当てはまっていなくとも、ボランティアという活動になにかしらの興味を抱いた人にとっては、自らの世界観を広げ、人を思いやる気持ちを育むための最高の場であるだろう。大学生活という将来を考える重要な時期に、様々な価値観を持った人と触れ合える環境はなににも変えられない財産であると筆者は考える。様々な価値観を持つ人と触れ合う中で、自分自身がしたい仕事、生き方を探すことができると筆者は考える。

今後の課題としては、集団として活動していれば必ず起きるであろう、“価値観の違い”をすり合わせていくためにはどうすればよいのか、より具体的に考えていきたい。

この論文は、あくまでも筆者自身の活動過程の一部である。誰もが同じ感情をもち、同じ過程をふむことはありえないであろう。また筆者は、“活動はこうあるべきだ”など一つの答えを出そうとしてこの論文を書いたのではない。これからボランティア活動を始めようとしている人、すでに行なっている人々に数ある活動の中の一つとして資料にしていただき、それぞれの活動に役立てば幸いである。

最後に、今までPAZ MUSICAを温かく見守ってくださった京都京田辺市の住民の方々、我々が地域とつながるためのかけはしとなり、アドバイスをしてくださった社会福祉協議会の職員様方に深く感謝している。また、卒業論文という形で自らの大学生活を見つめ直す機会を与え、絶えず熱心に指導してくださった指導教授、ティーチングアシスタント様方に、心より感謝を申し上げたい。

参考文献

- 内海成治・水野義之・入江幸男, 1999, 『ボランティア学を学ぶ人のために』世界思想社.
- Putnam, Robert, David., 1993, *Making Democracy Work: Civic Traditions in Modern Italy*, Princeton University Press. (= 2001, 河田潤一訳『哲学する民主主義——伝統と改革の市民的構造』NTT 出版.)
- Putnam, Robert, David., 2000, *Bowling Alone: the Collapse and Revival of American Community*, Simon & Schuster. (= 2006, 柴内康文訳『孤独なボウリング——米国コミュニティの崩壊と再生』柏書房.)
- Mead, George, Herbert., 1934, *Mind, Self, and Society*, University of Chicago. (= 1934, 稲葉三千男・滝沢正樹・中野収訳『精神・自我・社会』青木書店.)
- 平松闊・鵜飼考造・宮垣元・星敦士, 2010 『社会ネットワークの研究・メソッド』, ミネルヴァ書房.
- 山谷敬三郎, 1999, 「コミュニティ計画論 III: 地域における「音楽ボランティア」の活動を通して」, 『北海道女子大学短期大学部研究紀要』, 133-145.